リーチ先生（1）

（イギリス人の芸術家バーナード・リーチとその弟子・沖亀乃介は、美術評論家・柳宗悦の家に造った窯で陶器を焼き上げています。丸二日の火の番を続けたふたりは、窯を冷やす間、眠りにつきました。）

台所から、味噌汁の香りが漂ってきている。亀乃介は布団から飛び起きた。

廊下を小走りに、リーチの部屋へと出向いた。

「先生、お目覚めでしょうか。先生」

声をかけて、ドアを叩いた。返事がない。

「おーい、亀ちゃん。起きたのか。ちょっと来てくれ」

柳の声が、外から聞こえてきた。亀乃介は、急いで勝手口から庭へ出た。窯の前に、リーチと柳の後ろ姿が見えた。

着物姿の柳は、両腕を組んで、何ごとかを見守っているようだ。リーチはしゃがみ込んで、盛んに木槌を振っている。コツン、コツンとレンガが壊れる音がする。

①あっと小さく叫んで、亀乃介は、ふたりのもとへと駆け寄った。

「いけません、先生！　まだ壊しては……早すぎます！」

しかし、亀乃介の制止などまるで聞こえていないように、②リーチは木槌で窯の取り出し口をふさぐレンガを叩き続けた。

柳は亀乃介と目を合わせると、止めても無駄だ、と言わんばかりに、首を横に振った。

急速に窯を冷やすのがどんなに危険か、リーチはじゅうぶんわかっているはずだ。――それなのに。

ガラガラとレンガが崩れる音がして、窯の取り出し口が開いた。

リーチは、木槌を地面に落とすと、立ち上がって、両手に分厚い手袋をはめた。そして、ようやく振り向くと、言った。

「さあ、出来上がった。ついに完成したんだ。取り出そう、カメちゃん」

「いけません、先生。まだ熱すぎます。あわてて手を出したら、やけどしてしまう。それに、そんなに早く取り出したら、ひびが……」

むっとしたような顔になって、リーチが言った。

「手を貸してくれないなら、私がひとりでやる」

逸る心を、リーチはついに抑えきれなかった。

じゅうぶんに冷めるのを待たずに無理やり取り出した陶器のほとんどは、見るも無惨な状態になっていた。

※焼成する際、無我夢中で窯に火を入れたせいで、大量の灰が作品の上に降り落ち、表面がざらついた仕上がりになってしまっていた。

そのほか、ひびが入ったもの、割れてしまったもの、想像していたのとはまったく違う色になってしまったもの――。

③窯の中から陶器を取り出すリーチの顔を暗い雲が次第に覆っていった。窯を開ける喜びと興奮はたちまち消え、その表情は石のように硬くなった。

（原田マハ『リーチ先生』集英社　による）

※焼成…陶芸で、成形した土を高温で焼き、陶器とすること。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「あっと小さく……駆け寄った」とあるが、このときの亀乃介の様子として適当なものを選びなさい。

ア 陶器がすでに完成したことを知り、陶器の出来ばえがどのようなものか一刻も早く見ようとしている。

イ まだ窯を開けてはならないのにリーチが窯の取り出し口を壊しているのことに気づき、リーチを止めようとしている。

ウ ふたりが何をしているのかがわからず、窯のそばまで近づいて柳とリーチが何をしているのかを確認しようとしている。

〔　　〕

(2) ――線②「リーチは木槌で……レンガを叩き続けた」とあるが、このときのリーチの様子として適当なものを選びなさい。

ア ついに焼き上がった陶器の仕上がりを確認したいと気が急いている。

イ 制止しようとするふたりへの反発から、無理に窯を開こうとしている。

ウ 急速に窯を冷やしたために陶器が無惨な状態になり、失望している。

〔　　〕

(3) ――線③「窯の中から……覆っていった」とあるが、この表現について正しく述べたものを選びなさい。

ア 窯から陶器を取り出すにつれて陶器の状態に落胆していくリーチの心情を、比喩的な表現で描いている。

イ 窯から陶器を取り出すリーチを止めることができなかった亀乃介の後悔を、象徴的な情景で表している。

ウ 窯から陶器を取り出す作業に長い時間がかかったことを、リーチの顔を覆う雲を通じて間接的に表現している。

〔　　〕